層気象台・高層課・気象研究所のオゾン関係者（すでに他の所属に変わられた方も多いが）に深く感謝します．また整図を手伝っていただいた北原瑠美子さんにも謝意を表わします．なお本稿の記述の中に筆者が気づかずに誤解している点もあり得ることを附記し，皆様の御批判をあおぐ次第です．

参考文献

23) Newell, R.E. (1961): The transport of trace substances in the atmosphere and their implications for the general circulation of the statosphere; Geophysica pura e Applicata, **49** p. 137～158.
24) Brewer, A.W. (1949); Evidence for a world circulation provided by the measurements of helium and water vapour distribution in the atmosphere; Quart. J.R. Met. Soc. **75** p. 351～363.
25) Dobson, G.M.B. (1956); Origin and distribution of polyatomic molecules in the atmosphere; Proc. Roy. Soc. London. Ser. A. **236** p. 187～193.
26) Mastenbrook, H.J. and J.E. Dinger (1961); Distribution of water vapor in the stratosphere; J. Geophys. Res. **66** p. 1437～1444.
27) 片山　昭 (1962); 地球の熱収支; 気象研究ノート，第13巻 p. 101～169.
28) 朝倉　正 (1963); 成層圏循環と地上気象の相互関係; 測候時報，第30巻. p. 135～168.
29) Junge, C.E. (1962); Global ozone budget and exchange between stratosphere and troposphere; Tellus **14** p. 363～377.
30) Regener, V. H. (1957); Vertical flux of atmospheric ozone; J. Geophys. Res., **62** p. 221～228.
31) Wexler, H., W. Moreland, and W. Weyant (1960); A preliminary report on ozone observations at Little America, Antarctica; Monthly Weather Review. **88** p. 43～54.
32) Craig, R.A. (1951); Radiative temperature changes in the ozone layer; Compendium of Met. p. 292～302.
33) Pressman, J. (1954); The latitudinal and seasonal variations of the absorption of solar radiation by ozone; J. Geophys. Res. **59** p. 485～498.
34) Johnson, F.S. (1953); High-altitude diurnal temperature changes due to ozone absorption; Bulletin Amer. Met. Soc. **34** p. 106～110.
35) Pressman, J. (1955); Seasonal and latitudinal temperature changes in the ozonosphere; Journ. Met. **12** p. 87～94.
36) Manabe, S. and F. Möller (1961); On the radiative equilibrium and heat balance of the atmosphere. Monthly Weather Rev. **89** p. 503～532.
37) Manabe, S. and R. F. Strickler (1964); Thermal equilibrium of the atmosphere with a convective adjustment; Journ. Atm. Sciences. **21** p. 361～385.

九州支部だより

1. 九州支部理事会

昭和40年4月23日福岡管区気象台の台長室で本年度第1回の理事会が開かれた．議題は今回の気象庁の人事移動によって，7名の理事中山田国親（前長崎海洋気象台長）と毛利圭太郎（前鹿児島地方気象台長）の両理事が住所を東京方面に変更されたので，その補充選挙に伴い理事会の推薦候補者をどうするかについてであった．その結果理事会として候補者5名を推薦することになり，5月10日付の九州支部だより第20号で会員に通知した．

2. 九州支部理事補充選挙の結果

投票締切日を40年6月5日とし，6月7日投票総数110票を開票の結果，新理事の2名は沢田龍吉（九州大学理学部教授）と久保時夫（長崎海洋気象台長）と決り，次点者は比嘉政雄（鹿児島地方気象台長）であった．

なお留任理事は荒川秀俊（支部長），青木滋一（常任）山田三朗（常任）武田京一，坂田勝茂の5名である．

春の大会で感じたこと

懇親会の夜何時までも歓談していられる会員の姿を眺めて我々世話役もやっと終ったと思ったことでしたが，考えてみれば，このように地方で大会が開かれる場合，地方側からいっての大きな成果は，一つは大きな学会で立派な講演を聞いて高いレベルの空気に接することであり，もう一つは多くの人達と話し合えることでしょう．後者のことを考えると外国の学会のように毎日午前と午後にコーヒーの時間をたっぷりとって個人的に討論出来るように工夫すればもっと成果があがるのではないかと夢のようなことを考えてみました．そのためには講演数を先着順に定員でしめ切って次にまわしてもよいと思います．最近は座長の努力が実って来たようですが発表者も一層マナーをまもって実のある討論が出来ることを望みます．

（中島暢太郎）